

A 4 7 / 3 0

高校生向けフランス語文法教科書（初級～中級向け）の作成

橋本悦子（カリタス女子中学校・高等学校）

1. はじめに

中学高等学校でのフランス語教育の具体的な様子からご紹介して、このたびの「フランス語文法教科書」作成の意義と研究成果について報告する。

2. 中等教育におけるフランス語教育(カリタス女子中学高等学校(報告者勤務校)での実践)

創立母体修道院がカナダのケベックに本部を持つことから、カリタス女子中学高等学校では1960年創立当初から、外国語の授業には英語とフランス語の二つの外国語を設置してきた。中学では、フランス語を第2外国語として1年生から全員必修で学び、高校では選択によって第1外国語か第2外国語として学習することになる。

2.1. 中学校の内容と教科書

中学3年間のフランス語は、会話に必要な最低限の文法事項を扱い、日常的なことを読み、書き、言えることを目的として授業を行っている。どの学年も、日本人教員とフランス語を母語とする教員による授業である。教科書は本校で作成した教科書を使用し、日本の中学生にふさわしい学習方法を計画してきた。

この教科書“*Bonjour les enfants*（題名）ボンジュールレザンファン”であるが、特に女子生徒がフランス語を学ぶという視点で作られている。フランス語にある名詞・形容詞の性数とそれに合わせた動詞などの変化を、使用者の立場に合ったシチュエーションや表現の仕方を準備し、今すぐ使えるをモットーに、女子中学生が話す言葉に合わせたテキストにしているところが、特長である。この教科書は、本校と同じようにフランス語を中学の時点で学ぶ、カトリック系の四谷の雙葉中学校でも採用されてきたし、女子だけのクラス編成を作る公立高校でも採用されてきた。

2.2. 高校の内容

本校では、高1段階で第1外国語に英語とフランス語のどちらかを選択することになる。第1外国語に英語を選択した生徒は、第2外国語にフランス語を選択することができる。第2外国語のフランス語は、会話の授業を中心とし、日常生活での運用能力を延ばすことを目的としている。

今年度の第1外国語フランス語の選択人数は、高3が30人、高2が21人、高1が31人、すでに中3が選択希望を届けているが、おおよそ毎年25～30人規模の生徒が、フランス語を第1外国語に選択していると言える。第1外国語の場合は、特に大学受験に対応した、総合的なフランス語力を養成することを目的として、各学年相当数の単位を確保し、実力養成を行なっている。その際利用する教科書にも一部自作教科書を準備して（本校自作文法教科書“*Mon sac à dos*（題名）モンサカド”につい

ては後述する)、本校のカリキュラムにあった、中学で学習した事項に積み重ねる形で力をつけていく授業作りをしてきた。

3. 自作教科書の作成経緯

本校が自作教科書を作成してきた背景について、ここで説明しようと思う。今回の研究テーマ「高校生向けフランス語教科書(初級～中級向け)の作成」に至る経緯に関わるからである。

3.1. 既存のフランス語教科書が使えない

一般に、日本で出版されているフランス語の教科書というと、そのほとんどすべてが大学生、及び一般の社会人を対象としたものであり、ABCの発音から接続法に至る文法項目のほぼレジュメの体裁をとっている。日本語の説明も、中学生にとっては難解で、解説も不十分であり、例文が中学生にとっては不適當であると思われた。

また、フランスやカナダなどで出版されている外国人向け教科書は、対象となる年齢が中学生より低いか、高いかのどちらかであることが多く、主に英語を母語とする外国人を対象としているところに特長があるが、これが一番大きな問題なのである。当然のことながら、文法事項の配列が日本人初学者側から見れば組織だっておらず、唐突に、日本人にとっては理解の難しい代名動詞、代名詞、所有形容詞などが出現し、またその頻度を重視するあまり不規則活用動詞も相次いで取り上げている。使いやすいように配列し直すなどの小手先の工夫は、頻度順に使用していることの多い利用語彙の問題もあって難しく、かえって内容を補うための補足テキストを作る手間が余計にかかることが予想された。

そして両者ともに共通して問題だったのは、大学受験に向かって準備する高校生には必要不可欠といえる練習問題の少なさである。既存の大学生向けテキストを利用すると、内容の説明を補うため、また反復練習を促すためにどうしても補充プリントが多くなり、その結果、教科書のもつ役割が相対的に低下した。

3.2. フランス語教科書の作成

本校では、1970年代後半に中学生向けテキスト“*Bonjour les enfants I, II, III*”を、そして1980年代後半には高校生向け文法教科書“*Mon sac à dos*”を、それぞれまずは紙のファイルでとじた体裁で発行し、数年の使用を経て本の体裁に仕上げて発行してきている。その後もほぼ毎年改訂作業を入れ、フランス語圏文化を紹介しつつ、時勢に合った事象と普遍的な価値の紹介をこころがけ、発行してきている。

“*Mon sac à dos*”の作成に際しては、一から作成するというより、それまでの担当者が作成し続けてきた補充プリントという多くの資料を利用することができた。そして、多くの他教科の協力を得ることのできた、本校独自の内容を誇るものである。(外国語を学ぶ姿勢として英語科と共同しての挨拶文を載せた。また、挿絵には美術科、歴史を扱う内容の助言に社会科、本校の紹介にあたる文章の助言にはカトリック倫理科、などの協力をもらった。)

4. このたびの「高校生向けフランス語文法教科書」作成について

4.1. きっかけ —やっぱり既存の教科書ではもの足りない—

近年、大学のフランス語教育の週あたりの時間数減少や学生のモチベーションの変化によるもので

あろうか、発行されるフランス語初習者のためのテキストの内容が極端に縮小されたり、文法事項の名称紹介にとどまるようなテキストを散見するようになった。多色刷りで写真や挿絵を多用し、視聴覚資料にも工夫を凝らした教材の利点は認めつつも、その対極にある内容重視のフランス語文法教科書が発行されないままなのだ。大学でフランス語原書に取り組んだり、フランス語教育者をめざす一部の学習者にとっては、物足りない学習状況であると思われる。授業の中では端折ることが多いためか、「条件法」や「接続法」にいたるまでしっかり教える教科書、自学もできる練習問題がたっぷりした教科書、がない。高校での特別な事情に合う教科書作成が、出版社では計画されていない。

4.2. 教員同士のネットワーク

ところで、在日フランス大使館が旗をふって、数年間準備を重ねてきた「日仏高等学校ネットワーク・コリブリ」が2006年から本格始動し、日仏高校生同士の長期及び短期交換留学が行われるようになった。日本においてもフランス語教育実践校（高等学校）の参加・加盟が年を追うごとに増えてきたし（2010年現在日本：32校、フランス：22校。2010年の交換留学の数：50組）、このような形ができたことによって教員同士も以前に比べてずっと頻繁に関わりを持つようになった。

この組織作りの最初の大きな目的は留学推進だが、日本の高校側としては、留学に加え、第1外国語、第2外国語の高校が、公立、私立を問わず、組織を作っていくという今までなかった組織作りに大きな意義を感じている。初めての横のつながりができあがっていると言うことができる。高校においても、大学でも、フランス語教育は、多くの学校で非常勤講師によって支えられている現状があるが、それはひとりの教員がいくつもの異なる職場環境で（高校で、大学で、第1外国語として、第2（3）外国語としてなど）の豊富な経験を持つということでもある。専任という立場でもまた、教科メンバーが大変少なかったり、他の教科にはない特殊性を抱えながらの勤務であったり、という事情がある。

実践報告や、問題を分かち合う機会を得る中で、実情にあった、必要とされる文法教科書の作成を目指すグループ作りが提案された。これがそもそもの教科書作成チームの発足であった。

4.3. 初級～中級向け「フランス語文法教科書」基本編集方針

1. 対象者：広く一般に。
2. 章立て：46課と細分化し、文法事項の難所部分をゆっくり詳しく教えるもの。
3. 形態：本体「基本フランス語文法教科書（仮題）」と別冊「ベースと応用ドリル（仮題）」に分けて、作成していく。練習問題は豊富に。

(1) 対象：対象は広く一般に

最重要課題は、作成チーム「テキスト・リセ」の構成員がそれぞれの授業で使う文法教科書作りである。チームメンバーそれぞれの立場では、対象者に、中高6年間で第1外国語としてフランス語を学ぶ生徒を想定していたり、第2外国語としてフランス語を始める高校生に補助教材として持たせて息長く自学テキストとしても使用させることを想定したり、というそれぞれの思惑があった。そのような経験やアイデアを豊富に盛り込んで、一言で「高校生」と言っても実に様々な取り組み方があることを利用して、そのまま広く一般に使えるものを目指すことにした。当初から計画していた「高校生向け」という言葉を名称に残したとしても、対象を広く一般に視点を向けることで内容の充実をはかれるからである。

(2) 章立て：46章と細分化し、難所をゆっくり

章立てでは最終的には46章で脱稿する予定。順番も初学者の利用を念頭においてじっくり考えた。考え進めるためのたたき台として、カリタス学園仏語科作成の文法教科書“*Mon sac à dos*”（全43章）を利用したが、このテキストは、カリタス女子中学校3年間で“*Bonjour les enfants I, II, III*”を学んできた前提で、さらに大学受験に備える目的で作られているため、初級～中級者向けテキストとしては様々な過不足があり、「全体的な修正」という当初計画を遙かに超えて、「本格的な制作」をすることになった。

とりわけ「関係代名詞」、「条件法」、「接続法」については、既存テキストにはない大胆な章立てを行い、取り組む学習者のやる気を励ますような形を計画した。

(3) 形態：本体と別冊の2本立てで

『本体「基本フランス語文法教科書（仮題）」』の特徴

- (a) 各章は見開き2ページで完結するようにする。
- (b) 原則として、左ページが説明、右ページが練習問題。『本体』の練習問題は必ず押さえるもの、として分量を制限する。
- (c) 初学者及び自学する者を意識して、前半部は特に“*Mon sac à dos*”よりも全体的にレベルダウン。すべての例文の訳文をつける。

『別冊「ベースと応用ドリル（仮題）」』の特徴

- (d) 『本体』の説明の補助やより細かい説明、動詞の活用形に関する図表といった、学習者の基盤形成を助ける補助資料を盛り込む。
- (e) 『本体』右ページにおさめる練習問題の分量制限に伴い、基本問題と中上級応用問題に関しては『別冊』の方にとりいれることにする。つまり成長段階が「ホップ・ステップ・ジャンプ」の3レベルと考えると、「ホップ」と「ジャンプ」を『別冊』が担う。そして『本体』の練習問題と、レベルの高低の幅があるようにし、学習者の必要に応じて選ぶことができる仕組みにする。
- (f) 練習問題の *Version*（仏文和訳）と *Thème*（和文仏訳）のような問題は『別冊』で扱う。

(4) その他

- ① 用語の統一 例：*l'infinitif*を日本語でどう表すか、不定法／原形／不定詞？→「不定詞」に
- ② 国籍をあらわす形容詞は、なるべく幅広く選ぶ。
- ③ 登場人物のやりとりには、できるだけストーリー性を持たせる。
- ④ 発信型学習テキストとして注意を払い、自分について語ることを目指した課題も盛り込む。

5. あとがき

教科書作成チームが4月に発足し、初会合をしてからほぼ月ごとに集まりを持ち、それぞれの宿題についてはインターネット通信を利用してやりとりを重ねて形を作ってきた。今までは勤務校での取り組みという展開しかできなかったことが、それぞれの経験に基づく知恵を出し合える好機を得て、各人の研究成果を形にすることができた。今後も引き続きそれぞれの職場での取り組み継続の励みになっていくだろう。仲間を得たことは、教科書完成とともに、私たちの宝である。